

二〇二五年度（令和7年度）

横浜女学院中学校

C 入学試験問題

令和7年2月2日（午前）

国

語

注意

- 1 指示があるまで開けないでください。
- 2 問題は、20ページあります。
- 3 解答はすべて解答用紙に記入しなさい。
- 4 時間は50分です。

受験番号

氏名

— 次の文章の——線①②③④のカタカナを漢字に、漢字をひらがなにしなさい。また、文章中の漢字の間違いまちがを1か所ぬき出し、正しい漢字に直しなさい。

「ドク^①を食らわば皿まで」という言葉がある。罪^{つみ}を犯^{おか}したのであれば、後には引けないので最後まで悪^{あく}に徹^{てつ}しようという意味だ。元来^②、「皿まで」は「皿^な舐^なぶれ」という表現だったが、時代が下るにつれ変化したようだ。ただ、こういった類^③い言葉に対して、「身のケツ^④パクを証明するのが難しい現代においては、重犯罪を助長しかねない危険な言葉だ」という批判が寄せられることはあるだろう。だが、その不安は「小事^かに拘^かわりて大事を忘るな」かもしれない。

二 一次の文章は、こざわたまこ『教室のゴールデンロックスゾーン』の一節です。「宇手先生」は主人公の教室にやってきた教育実習生です。問題文は、その「宇手先生」の最後の授業の場面からです。これを読んで、あとの問いに答えなさい。ただし、設問の都合上、文章の一部を改めています。（字数制限のある問いは、句読点や記号も一字に数えます。）

「……今日はいつもと違う雰囲気^{ぶんいき}で、ちょっと緊張^{きんじやう}しますね」^①

宇手先生がそう言つて、咳払い^{せきばらい}を挟んだ。男子の日直は、と言われて、池田君^{いけだ}が手を挙げる。すんなり立ち上がり、号令をかけた。起立、礼。これは問題なく、終えることができた。教室の後ろに教頭先生や校長、学年主任といった強面のメンバーが並んでいるせいか、クラスの雰囲気^{ぶんいき}がぎこちない。

「今日の授業ですが、教科書はしまつてもらつて結構です」

宇手先生の言葉を受けて、教室がにわか騒^{さわ}がしくなる。え、まじで？ ラッキー。うてつち、やるじゃん。ていうかこれ、もう寝ていい？ 自習^{じじゆつ}ってこと？ その様子を見ていた戸塚先生^{とづか}が、静かに、と手を叩いた^{たた}。

「あー、えっと。ここにいる先生方にも相談^{さうだん}して、今日の授業は、僕^{ぼく}からみなさんへの挨拶^{あいさつ}の場とさせてもらうことにしました」

先生はいつも通り、か細い声で私達に語りかけた。声量も滑舌^{かつせつ}も、実習の間に劇的な変化を遂げたようには見えない。

「まずはこの一ヶ月、本当にありがとうございました。いたらない僕の授業を受けてくれたことに、感謝^{かんしや}します。僕はご存知^しのとおり、人前に立つのも、喋^{しゃべ}るのも、得意な人間ではありません。実際にここに立ってみて、よくわかりました。多分

僕は、教師に向いているような人間ではないのだと思う」

ざわ、と教室が微かにどよめくのがわかった。何それ、そんなこと言っちゃっていいの。ちらりと戸塚先生の様子を窺うと、先生は意外や意外、字手先生の話にしっと耳を傾けていた。

「ただ、僕は僕なりの理由でここに立っていて。今日は、それをみんなにお伝えしたいと思っています」

そう言って、先生はぐるりと教室を見渡した。先生の目に私達は今、どんな風に映っているんだろう。

「みなさんは、アラン・チューリングという人を知っていますか？」

特に反応がないのを確認してから、イギリスの天才数学者の名前です、と先生が続ける。

「数学だけではなく、物理学にも造詣の深い人でした。十六歳の時、アインシュタインの論文を読んで文句をつけたなんて逸話があるくらい」

誰かがそれを聞いて、へえ、とつぶやいた。先生は続けて、いくつかの名前を口にした。谷山豊、ジェロラモ・カルダーノ、クルト・ゲーデル、新谷卓郎、ジョン・ナッシュ。どれも、教科書ではあまり目にするのではない名前だった。

「全員、もうこの世にはいない数学者の名前です。僕に彼らのことを教えてくれたのは、中学時代の恩師でした。僕に、教師になれと言ってくれた人です。見ての通り、僕は子どもの頃、活発なタイプの生徒ではありませんでした。小学生の頃は体が弱くて学校を休みがちでしたし、たまに登校してもひとりぼっちで、友達なんて一人もいません。学校で二人組を作られるのは苦手で、必ずとっていいほどあまりものになるのが、僕です。作られるのが三人組でも、四人組でも、僕は決まって最後の一人になってしまふ。そんな僕を見て、その先生が言いました。② そんなの当たり前じゃないか、って」

すると、先生が私達の名簿めいぼを手に取り、このクラスは全員で何人いますか、と首を傾かげた。目の前にいた池田君が、三十一人です、とそれに答える。

30

「……ああ。僕の時と同じですね」

先生はそう言っ、くすりと笑った。

「僕のクラスは、三十七人でした。わかりますか？ 三十七や三十一は、二人組でも三人組でも割り切れない数字です。つまり、素数です。だから、お前がそのことを気に病む必要なんて、これっぽっちもない。あまりが出て当然の数字なんだから、って」

35

一瞬いっしゅん、なるほど、という空気が流れたにもかかわらず、先生はそれをませかえすように、「まあ、今思うとただの詭弁きべんですけどね」と言っ、小さく肩かたをすくめた。

「だって、そうでしょう？ 人間関係っていうのは、数学の理論とはまったく違う。素数だろうが素数じゃなからうが、あまる時はあまる。僕があまり物だったのは、クラスの人数が素数だったからじゃない。人付き合いが苦手だったからです。

そのことに気づいたのは、随分ずいぶん後になってからでしたが。でも、僕はその詭弁きべんのおかげで卒業までの日々を生き延びるこ

40

とができました。先生が勧すすめてくれた数学者の伝記あきを読み漁るようになったのも、その頃です。数学者、と言われる人達は、大抵たいてい気難しくて、変わり者で、とても数奇な運命を辿たどっている。そのことが、僕の心を慰なぐさめてくれました。彼らの人生を追っている時だけ、僕は一人じゃなかった。友達や恋人のいない僕にとって、彼らが唯一の話し相手だったんです」

先生はそこで言葉を切ると、近くに置いてあったペットボトルの水に口をつけた。キャップを締め直し、ペットボトルを

戻して、再び前に向き直る。

「先日、先生が亡くなりました。この実習が始まる前のことです」

え、と顔を上げる。先生の表情は変わらず、あくまで淡々とした口調だった。教室に小さなどよめきが広がる。

「一人暮らしのアパートで倒れて、そのまま。先生には家族も、友人も、パートナーと呼べる人もいませんでした。見る人から見れば、さみしい晩年だったのかもしれない。実際、葬儀の席でそんなようなことを言っている人も見かけました。独り身のまま、あんなところでさみしく死んでいくなんて、と。でも、本当にそうでしょうか？ 形見分けのために訪れた

先生のアパートは、かつての進路指導室と同じ香りがしました。自分で挽いたコーヒー豆と、ふちの欠けたマグカップ。台所には、水切りラックの上に食器がきれいに並んでいて。今までに解き終えた数独の本と、先生が好きだった銘柄の煙草が、これでもかかっていうくらい床に積まれていました。そういうものに囲まれて死んでいったことが、先生にとって不幸なことだったのか。僕にはよく、わかりません」

教室が、しんと静まり返った。もちろん全員が全員、先生の話を聞いているわけじゃない。大沢君はすでに爆睡しているし、濱中さんは机の下ですっと、自分の爪をいじっていた。それでも、みんなが少しずつ、先生の声に耳を傾け始めているのがわかった。

「……みなさんは、誰とも分かち合えないさみしさを、何と呼ぶか知っていますか」

孤独です。先生は、誰の言葉を待つでもなく、きっぱりとそう言い切った。

「孤独は、誰とも分かち合うことはできません。自分以外の、誰とも。これも、素数みたいなものですね」

そう言つて、ふつと口元を緩ませる。

「素数は、一と自分自身でしか割り切れない数字です。そんな風に、自分自身でしか割り切ることのできない孤独が、この世界にはたくさんあります。でも、大事なのは素数が特別な数字だということではありません。特別な数字が、この世にはあふれ返っている、ということですよ。先生は、孤独でした。僕も、そうです。そして多分、みなさんも。それは、友達がいるとかいないとか、恋人ができる・できないとは、まったく無関係なことです。そのことを、さみしくない、と言つたら嘘になります。でも僕は、そのさみしさが暗闇の中で時々きれいに光ることを知っています。僕には、孤独のおかげで出会えたものがたくさんあるから」

だから自分の、自分だけの孤独を大切にしてください。その孤独こそ、あなたの人生に光を灯してくれるものだから。先生はそう言つて言葉を切り、深く深く、息を吐いた。

「これで、僕の授業を終わります。ここまで聞いてくれて、ありがとうございます。みなさん、この一ヶ月間、本当にありがとうございます。ありがとうございました」

先生が教壇から下りて、ぺこりと頭を下げた。では、日直の人。その瞬間、伊藤さんがぎくりと体を強張らせるのがわかった。ロウソクの灯が吹き消されたような沈黙が、ふつと教室を包む。あれ、とつぶやいた宇手先生が、きよろきよろと辺りを見回した。

「日直の人」

伊藤さんは俯いたままだ。その背中が、微かに震えているように見えた。泣いているようににも、見えた。

「ええと、今日の日直は池田君と——」

先生が黒板を確認しようとした、その時だった。

「——起立」

⑤ 澄みきった声が、教室に響き渡った。それが男の子の声だったのか、女の子の声だったのか。咄嗟にはわからなかった。もしかしたら藤村さんだったのかもしれないし、和久井さんだったのかもしれない。あるいは彼女らの会話を聞いていた、第三者かもしれない。あるいはそんな事情を知る由もない、他の誰かだったのかもしれない。80

「礼」

全員が立ち上がったのを確認して、号令の続きを引き取るように、伊藤さんがつぶやいた。ぱちぱちぱち、とどこからともなく拍手が湧き起こった。クラスみんなはもちろん、後ろの先生達も、戸塚先生も。そして、その中心にいるのは、何かが起こっているのかわからないという顔で教壇の前に立つ、宇手先生の姿だった。

(こざわたまこ) 『教室のゴルディロックスゾーン』より)

※詭弁：まちがった理屈を正しいと思いきませる論法。

問一——線①「今日はいつもと違う雰囲気」（1行目）とありますが、なぜそのような雰囲気になっていきますか。その理由を説明したものとして最適なものを次から1つ選び、記号で答えなさい。

ア 生徒全員が、校長先生や教頭先生をもてなそうとしているから。

イ 生徒が私語を慎み、良い雰囲気の教室を作ろうとしているから。

ウ 自習になるかもしれないと、生徒が期待しているから。

エ 最後の授業になることを、事前に告知してもらっていたから。

オ 威厳のある先生たちに、生徒が気後れしてしまっているから。

問二——線②「そんなの当たり前じゃないか」（28行目）とありますが、なぜそのような「恩師」は言ったのですか。そ

の理由を説明した次の文に当てはまる言葉を本文中からさがし、10字程度でぬき出し答えなさい。

クラスの人数は、10字程度だから。

問三 —— 線③「僕はその詭弁のおかげで卒業までの日々を生き延びることができました」(40～41行目)とありますが、

この時の宇手先生的心情を説明したものととして最適なものを次から1つ選び、記号で答えなさい。

ア 恩師の詭弁が当時のどうしようもない自分を慰めてくれたため、恩師と同じように数学の話を通して誰かに寄り添^そってあげたいと思っている。

イ 恩師のこじつけたような数学の話によって不安が除^{のぞ}かれていたことを伝え、自分のような思いをしている生徒たちを救いたいと思っている。

ウ 恩師は数学の話と人間関係の話を混合させていたが、その話は分けて考えることで救いになるということを教えた
いと思っている。

エ 恩師から教わった数学者の人生と驚くほど似通っており、変わり者であつても他者から認められるということを伝えたいと思っている。

オ 数学者ばかりすめられ当時はうんざりしていたが、その数学者の伝記を読むことで現在は教師という職に就くことができたのでありがたく思っている。

問四 —— 線④「僕にはよく、わかりません」(54行目)とありますが、この時の宇手先生の思いを説明したものとして最

適なものを次から1つ選び、記号で答えなさい。

ア 友人や家族に看取られず孤独に最後を迎えた恩師の死をむだにせず、生徒とともに孤独を考えるきっかけにしたいという思い。

イ 孤独に死んでいった恩師に対して同情する一方で、大切にしていたものとともに幸福に死んでいった恩師をうらやむ思い。

ウ 恩師の死に対する周りの評価への疑問と、お気に入りのものに取り囲まれながら死んでいった恩師は幸福だったかもしれないという思い。

エ 誰からもかえりみられることもなく死んでいった恩師の死のあり方について、どのように評価したらよいか分からないという思い。

オ 人々が恩師の孤独死をさびしいものと考えていることに納得できず、目の前の生徒も同様に恩師の死を孤独なものであったと考えるほしくないという思い。

問五 「 」 (72行目～74行目) で囲ったか所について次の(1)と(2)の問いに答えなさい。

- (1) 「 」の中から表現技法が使われているか所をぬき出し、それと同じ表現技法が使われているものを次から1つ選び、記号で答えなさい。

ア 僕は朝から晩まで機械のごとく働かねばなりませんから。(有島武郎『ある女』)

イ 親譲りの無鉄砲むてっぽうで小供こどもの時から損そんばかりしていた。(夏目漱石『坊ちゃん』)

ウ 夢はいつもかえって行った 山の麓ふもとのさびしい村に (立原道造「のちのおもひに」)

エ 人間というよりは呼吸のある泥人形であった。(北条民雄『いのちの初夜』)

オ こんなに美しいときが、なぜこんなに短いのだろう (梶井基次郎「冬の日」)

- (2) (1)でぬき出した表現技法によって、どのような様子を表現していますか。20字程度で説明しなさい。

問六 —— 線⑤「澄みきった声が、教室に響き渡った」(80行目)とありますが、この時の教室はどのような様子でしたか。

そのことを説明したものととして最適なものを次から1つ選び、記号で答えなさい。

ア 宇手先生の恩師の孤独な最後が、あまりに痛ましく衝撃しょうげきを受けている様子。

イ 宇手先生をつまらない話が、ようやく終わることに安心している様子。

ウ 宇手先生の話をも、他クラスに言い広めることを心待ちにしている様子。

エ 宇手先生の、孤独が人生に光を灯してくれるという話に感心している様子。

オ 宇手先生の、最後の話が終わってしまったことをくやんでいる様子。

問七 —— 線部「僕は僕なりの理由」(16行目)とありますが、それはどのような理由ですか。宇手先生の話の内容全体を

ふまえたうえで60字以内で答えなさい。

三 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。(字数制限のある問いは、句読点や記号も1字に数えます。)

私は二〇年近く、大学教員として大学生をずっと定点観測してきました。授業でもゼミでも、積極的に学生の皆さんに、自分が考えていることを話してもらいます。いつの頃からか、学生たちがあることに縛しばられていることが、気になりました。

「他人や周囲に迷惑をかけてはならない」

「当たり前じゃん」とあなたは思うかも知れません。でも、「迷惑をかけてはならない」と必死になっている学生たちを見ていると、法律に書かれているわけでもないのに、日本国憲法よりも遥はるかに気にして生きているのではないか、と思い始めました。「迷惑をかけてはならない」というルールは、看板や標識に書かれているわけでもないし、いかなる法律やルールにも規定されていないはずなのに、多くの日本人にとって生きる前提になってしまっている。その意味では、「迷惑をかけるな憲法」ではないか、と私は感じました。そして、その目で周囲を見渡してみると、日本国憲法の内容はすっかり忘れていた学生たちであっても、「迷惑をかけてはならない」というのは、自分自身の行動規範きはんとしてすっかり身につき、日々気にして生きているようなのです。(中略)

YouTubeやTikTok、インスタやツイッター(現・エックス)などのSNSの世界は、キラキラ・ペラペラしています。^③
オシャレで着飾かざって、○○を買った(行った、できた、儲もちけた……)と騒さわぎ立っています。他人がキラキラして、それをペラペ

ラしゃべっているのを見聞きすると、「それに比べて自分なんて」と自分がちっぽけに思えたり、情けなくなったり、自信がなくなったりします。学生たちだけでなく、私自身だって、たまにそういう「幻想」に襲おそわれてしまう瞬間しゅんかんがあります。

でも、それは「いま・ここ」で生きる自分とは違う、そして表面的な他者の「見せびらかし」という意味では、幻まぼろしの想かんいとしての幻想なんです。そして、幻であるが故に、現実以上に輝いてみえる。その輝きと比較すると、自分なんて、落ち込んでしまう。やっぱり自分はダメなんじゃないか、イケてないのでは、とため息をつく。そういう悪循環あくじゆんかんサイクルが機能しているのだと思います。迷惑をかけずに必死がんばに頑張がんばっても、能力がないからか、報われない自分がある。一方、SNSの世界を見ると、自分と同世代はるでも、遥はるかに成功したり、上手くいってそうに見える他者がいる。それを見てると病やむし辛い。

……と書いてみましたが、実は上記に決定的に欠けていることがあります。それは、実感を持って自分のことを気にしてくれ、尊重してくれ、大切に扱あつかってくれる「他者」の存在です。たしかにSNS上の他者は、眩まぶしい羨うらやましい存在です。LINEやメッセージなどで声をかけてくれる存在もいるかもしれませんが。友だちに相談したら、話を聞いてくれるかも知れません。でも、そこであなた自身のことを尊重してもらえたでしょうか？

学生たちと話していると、「自分のモヤモヤやしんどい内容って、本当は誰かに話したいけれど、そんな重い内容を話してしまうと、相手に迷惑になりそうで、言えない」と言います。でも、私の前で、あるいはゼミ空間で「苦しいこと」を表現あらわしたり、「涙なみだを流す学生と出会っていると、具体的な他者が必要なんだろうな、と思うのです。それは、問題をズバズバと解決してくれる、アドバイスをしてくれる、「カリスマ」や「スーパーマン」ではありません。他人の話を聞かずにペラペ

ラと自分の自慢じまんに忙しい人いそがでもありません。そうではなくて、あなたの言葉にならない思いやしんどさ、苦しいことを、そのものとして表現しても否定されない。そのうえで、じっくりとただ聞いてくれて、できそうなら共に考えようとしてくれる。そんな存在が必要なのではないか、と。

私が出会う学生たちは、「他人に迷惑をかけてはいけない」だけでなく、「他者にどう見られているか」と顔色をうかがい、他者からの評価を気にしています。でも、その他者評価を気にするより、自分はどんなふうに感じているか、思っているか、考えているか、を仲間とシェアした上で、あなたはどの、と分かち合える関係性の方が、心地よいと思うのです。

心理療しんりりょう法家ほうかのシヨッターしよたさんさん (John Shoter) はアバウトネスアバウトネスとウィズネスウィズネスという二つの考え方の違いを説明してくれています。about-nessな考え方とは「○○について考える」やり方で、問題を対象化して「客観的に」分析ぶんせきする思考のことを指します。一見するとごく当たり前に思いますが、それは常に問題を細分化・他人事ひとこと化しやすしいし、他者の問題なら「それは○○が悪い」と上から目線で指導や指摘しでかをしやすいです。そして、学生たちの中には、そのような他者の指導や指摘を内面化して、自分の問題をうっかり正直に口にする、自分が批判・攻撃こうげき・否定されるのではないかと防衛ぼうぎよ的てきになっている人も、少なくないように思います。

一方、with-nessな考え方とは「○○についてあなたと私が共に考え合う」という姿勢です。物事を切り離はなして分割するのではなく、どのように関連付けられそうか、いかに相互作用そうごが起おこるのか、を大切にします。一方的な指導や助言、アドバイスをしていては、共に考え合うことにはなりませんよね。まずは相手が悩んでいること、しんどいこと、苦しいことを、遮さへらずに最後までじっくり聞いてみる。その中で、どんなに変だとかおかしいと思っても、まずはそっくりそのまま、相

手の話を否定せずにまるごと受け止めてみる。その後、その話を聞いた自分は心の中にどんなことが浮かぶかを、私を主語しごととして、話し始めてみる。それがwith-nessなアプローチです。^⑤

教師や親が、どれだけwith-nessで子どもたちに接してきたのか、というと、自分の胸に手を当てても、非常に心許こころゆないです。なぜなら、一人の教師が三〇人や四〇人の学生の前に立ち、一方的に授業をする、という近代教育のモデル自体が、そもそもaboutnessの考え方に基もとづいているからです。子どもたちは教師の話を黙だまって聞いて覚えればよい、というモデルです。私自身も、親や教師から、そういう価値観を当たり前のように引き継いできました。そういうモデルの中の「いい子」が、教師として再生産されていきます。すると、「先生、それは違うと思います」と授業を止める子どもは「教師にとって都合の悪い子」になるのですよね。I、教育やしつけにおいて、aboutnessが構造的に繰くり返されてきたのです。

そして、いまの若者たちをみると、SNSのキラキラ・ペラペラも含めて、aboutnessの話はあふれかえっているようです。でも、その一方、with-nessなアプローチで自分のモヤモヤや「苦しいこと」をじっくり受け止めてもらえる他者との出会いや話し合いの経験は、決定的に不足しているように思います。ゼミや面談めんだんを通じて、そういう場を作ろうと心がけていると、「こんなことを話したことがなかった」「こんなことを話してもいいんだと気づけて、楽になった」「ちゃんと聴きいてもらえたのが、すごく嬉うれしかった」といった声も聞こえてきます。そして、^⑦そういう自分の声を取り戻もどす、ちゃんと聴かれるプロセスこそ、「迷惑めいわくをかけるな憲法」から抜け出す第一歩だと、私自身は考えるのです。

たけばたじろし
(竹端寛『ケアしケアされ、生きていく』より)

問一 I (52行目)に入る語として最適なものを次から1つ選び、記号で答えなさい。

ア でも イ そして ウ つまり エ むしろ オ また

問二 ——線①「授業」(1行目)の読み方について、音読みと訓読みの組み合わせが同じものを次から1つ選び、記号で答えなさい。

ア 絵本 イ 番組 ウ 残高 エ 仕事 オ 夕刊

問三 ——線②「迷惑をかけるな憲法」(7～8行目)という表現に関する説明として最適なものを次から1つ選び、記号で答えなさい。

- ア 迷惑をかけることが「憲法」より重要視されている社会への怒りを表現している。
- イ 「憲法」と同等に迷惑をかけることが今は大切にされていることを表現している。
- ウ 最高法規である「憲法」が迷惑をかけることと並立していることを表現している。
- エ 国民の前提だった「憲法」が新しいルールにより衰退すいたしていることを表現している。
- オ 迷惑をかけることが「憲法」のように当たり前となつていることを表現している。

問四——線③「SNSの世界は、キラキラ・ペラペラしています」（11行目）とありますが、筆者はなぜそのように述べ

るのですか。その理由を説明したものととして最適なものを次から1つ選び、記号で答えなさい。

ア SNSではきらびやかな生活をしている人でも、現実ではその生活を維持^{いじ}するために人並ならぬ苦勞^{くろう}をしているから。

イ SNSで見かける資産家やインフルエンサーたちは、表面を取りつくりようことしかしていないから。

ウ SNSで見かける輝かしい現実は承認欲求を満たすために作り出されたもので、それは本質的なものではないから。

エ SNSで発信される内容は現実よりも輝かしく見えるが、それはあくまで見せかけの自慢^{じまん}でしかないから。

オ SNSの世界は現実よりもきらびやかだが、一方でその生活は一面的なものでしかなく、すぐに崩^{くず}れてしまうものだから。

問五——線④「決定的に欠けていること」（21行目）とありますが、何が欠けているのですか。そのことを説明したもの

として最適なものを次から1つ選び、記号で答えなさい。

ア 自分が抱える苦悩を受け入れ、自分の存在を尊んでくれる他者の存在。

イ 自慢話に終始せず、自分が求める的確なアドバイスを授けてくれる他者の存在。

ウ いつも自分のことを気にかけて、尊重してくれる優しい他者の存在。

エ 自分のことを尊重してくれて、言葉にならない苦しみを解決してくれる他者の存在。

オ 苦しみを分かち合ってくれて、自分のことを優先してくれる他者の存在。

問六 ——— 線⑤「それ」(46行目)の内容を説明したものととして最適なものを次から1つ選び、記号で答えなさい。

ア 他者の悩みを否定することなく素直に受け入れ、その悩みの主語を自分にしたうえで、最善の解決策を教えること。

イ 他者の悩みを否定することなく素直に受け入れ、その際に自分自身が感じたことを、他者に伝えていくこと。

ウ 他者の悩みを否定することなく素直に受け入れ、一方的ではないアドバイスの与え方を、自分なりに模索もさくしていくこと。

エ 他者の悩みを否定することなく素直に受け入れ、その悩みを自分事としてとらえていきながら、悩みの原因を追究していくこと。

オ 他者の悩みを否定することなく素直に受け入れ、悩みの共有がもたらす相互作用を期待し、他者に自分の感想を話していくこと。

問七 ——— 線⑥「モデル」(48行目)の本文中での意味として最適なものを次から1つ選び、記号で答えなさい。

ア 行使 イ 手本 ウ 原型 エ 模型 オ 着手

問八 —— 線⑦「そういう自分の声を取り戻す、ちゃんと聴かれるプロセスこそ、『迷惑をかけるな憲法』から抜け出す第

一步だと、私自身は考えるのです」(58～59行目)とありますが、筆者はなぜそのように述べるのですか。その理由を説明したものとして最適なものを次から1つ選び、記号で答えなさい。

ア「他者にどう見られているか」という他者評価を気にしないためには、能力がないからとあきらめず、必死に頑張ることが必要だから。

イ 自身の苦悩を抑圧よくあつすることを強いられた時代において、その抑圧を解放してくれる他者がいることは多くの人々にとって救いとなるから。

ウ 人々の間で憲法以上の力を持つようになった迷惑をかけてはいけないという価値観は、簡単に変えられるものではないから。

エ 迷惑をかけてはいけないという価値観から脱するには、自分の苦悩を他者に伝えても否定や攻撃を受けないという環境が必要だから。

オ 迷惑をかけることが許されないということが当たり前となった社会においては、そのはけ口となる環境を整備する必要があるのであるから。

問九 「with-nessな考え方」で他者と接することは、他者へ気を配るだけでなく自分もまた気を配ってもらえるということ

す。このように、互いに気を配り合える関係はどのようにすれば築けると思いますか。あなたの考えを100字で書きなさい。

